

芳年写生帖

野村胡堂

青空文庫

絵師の誇り

霖雨りんうと硝煙しょうえんのうちに、上野の森は暮くれ急いそぐ風情でした。その日ばかりは時の鐘も鳴らず、昼頃から燃え始めた寛永寺の七堂伽藍がらん、大方は猛火に舐め尽された頃までも、落武者を狩る官兵の鬨こだまの聲が、遠くから、近くから、全山に木精こだまを返しました。

「今の奴、何処どこへ逃げた」

「味方を四五人騙し討ちに斬って居るぞ。逃してはならぬ奴だ」

「まだ遠くへは行くまい」

「見付かったら、朋輩ひの敵、一と太刀ずつ斬るのだぞ」

背負^{しよい}太刀、ダン袋、赤い飾毛をなびかせた官軍が五六人、木立を搜^{さが}り、藪を分けて鶯^{うぐいすだに}谷の方へ降りて行きます。

その背後^{うしろ}から、物の影のように現われたのは、彰義隊士曰^{しやうぎたいしくさか}下部欽之丞^{べきののじよう}、二十四五の絵に描いたような美男ですが、輕傷^{あさで}を

受けた上、幾人か斬った返り血が、乱鬢^{みだれびん}と、蒼い頬と、黒羽^{くろは}

二重^{ぶたえ}を絞った白^{しろたすき}襷^{たすき}に反映して、凄まじさというものはありません。

「――」

不敵な舌鼓を一つ、四辺^{あたり}を見廻した欽之丞は、又も近づく人影に驚いて、木立の蔭に身を潜めました。

「畜生ッ、――俺は怪しい人間じゃねえ」

血の臭いに酔つて、無暗^{むやみ}に吠え付く犬を叱^なり乍^はら、桐油^{とうゆ}をすつ
ぽり冠^{かぶ}つて、降りしきる細雨の中をやつて来たのは、絵師^{えし}の月^{つき}
^{かよねじろう}
岡米次郎 こと、大蘇^{たいそ}芳年^{よしとし}の一風変つた姿です。

明治元年五月十五日の夕刻。

その時芳年は三十歳、御家人の子に生れて武士の血を享^うけた筈^{はず}
ですが、月岡^{げっかい}雪齋^{せつさい}に養われ、菊池^{きくち}容齋^{ようさい}、葛飾^{かつしか}北齋^{ほくさい}の風を
学んで、心も姿もすっかり町絵師になり切つて居りました。

^{あさぎ}
浅葱^{あさぎ}の股引^{はかまひき}に草鞋^{わらじ}がけ、桐油^{とうゆ}に上半身を包んで、目ばかり出
^{ふうてい}
た風体^{ふうてい}は、腰の矢立^{やだて}と懐の画帳^{えがちやう}が無かつたら、葛飾^{かつしか}在^あから来
た水見舞^{みづみまい}と間違^{まちが}えられるでしょう。

油のような生温かい雨が降るのに、芳年の身体^{からだ}は、ガタガタ小

刻みに顫ふるえて、時々はやつくりをして居ります。その上足あしもと許も不確かで、ヒヨロヒヨロと行つては、ぬかるみに足を取られて、泥の中へハタハタと坐つたりしました。

そのくせ、藪の中や道の上に、斬られて死んでゐる死骸を見ると、彰義隊であろうと官兵であろうと一々覗いて、その相好と、歪んだ姿態を見極めずには居られなかつたのです。

「ひどい傷だが、——仏様のような穏かな顔をして居る」

そんな無事な死顔は、芳年の興味を引かなかつたのでしよう。

「これは凄い」

時々死体の前に踞しゃがんで、懷から出した半紙横綴の帳面に矢立の筆を抜いて——細雨をかばい乍ら、写生の筆を走らせました。

不意に――

「居たぞ居たぞ」

バラバラと押おつ取とり巻く官兵、ギラリギラリと幾いくすじ条かの刃が芳年の眼に焼け付きました。

「あッ、お許し」

驚き騒ぐ芳年、桐油を引きむしられて襟髪を掴まれたまま、二つ三つ小突き廻されます。

「何者だッ、うぬッ」

「お許し、お許し下さりませ。私は怪しい者じゃございません」
行儀の悪い猫の子のように摘つまみ上げられた芳年は、意気地無くもガタガタ顫え乍ら、両手を合せて居ります。

「怪しくないことがあるものか。其処そこで何をして居た」

風体は落武者とも見えません。多分戦塵のまだ納まらぬ山内に潜り込んで、掠奪を目論もくろむ泥棒とでも思つたのでしよう。

「絵を描いて居ります。私は、私は芳年と言う浮世絵師で——」

「何？ 浮世絵師？ 出鱈目でたらめな事を言えい。浮世絵師と言えば、

美人や、役者や、道中の景色などを、面白可笑おかしく描いて、女子

供の慰み物にするのが稼業ではないか、——どれ見せい、貴様の

絵は——何なんだこりや、どれもこれも、気味の悪い、斬り合いや、

死骸や、梟さぎろし首ばかり、これでも浮世絵師と言うのか、怪しい奴

ツ」

頭かしら立たった一人の武士、芳年の写生帳をバラバラと開いて、不

審の眉を顰めます。

「そ、それは違います。あなたの仰おつしやる遊女や役者や道中絵を描くのは、泰平の世の浮世絵師、——女子供の慰みにする気はなくとも、世の中に事が無いと自然絵までが穩かになりますが、此こ節のせつのように、斬った張ったの世の中、耳元で鉄砲の音のする時節には、それ相応の浮世絵がなくてはなりません。この世の中に様々な姿を、あるが儘ままに写して、後の世に伝えるのは、絵筆とる者の勤めでござります。——今時華魁おいらんや役者の絵を描いて、一人で悦に入っていていられましょうか」

芳年は一所懸命でした。自分に掛けられた疑惑を解くというよりも、硝煙と血潮の洗礼を受けた浮世絵師の、精一杯の誇りを――

「斯^こう高らかに言つてやり度^たかつたのです。

「可笑^{おか}しな奴だ、言う事は一通り筋道が立っているが——そのくせガタガタ顫えて居るじゃないか。そんな臆病者に、血^ち腥^{なまぐさ}い場面が写せると思うか」

「写しますとも、ヘエ、身体の顫えるのは疖^{かん}のせいで、私の臆病のせいじゃございません。こんな時本当に突き詰めた人間の姿を写して置かなきゃ、——私は浮世絵師に生れた甲斐^{かい}がありません。何んの」

「よし、それじゃ、もっと凄^{しみ}いところを見せてやろう、一緒について来い」

「ヘエ——」

「さア」

促されて芳年は起ち上りましたが、意気地無くも膝の蝶番ちようつつがいが崩れて、ヘタヘタと綿のように泥濘ぬかるみへ坐つてしまいます。

「た、起てません」

「ハツハツ、馬鹿な奴だ。腰が抜けたのか、そんな事で本当の戦が描けるものか」

「少し気を落おちつ付けさせて下さい、直すぐ治ります」

「よしよし、何時いつまでも腰抜の相手になつても居られまい。誰か二人ばかり、此辺で見張つて居るが宜いい、我々はもう一度落武者を狩り出して来よう」

芳年は腰の抜けたまま、松の根方に縛り付けられ、官兵二人は

それを見張るともなく残されました。

あとの一隊はバラバラと上野の森へ、暮れ残る道を取って返します。

落武者欽之丞

「やい、絵師」

「へエ——」

「俺を描いて見ろ」

「へエ——」

「この武者振りを一つ描いて見ろ、出来が良かったら、国への土_み

産^{やげ}にしてやる」

一人の官兵は威儀を作りました。

「縛られて居ちや描けません」

芳年は泣き出しそうでした。

「よしよし、それじや暫^{しば}らくの間縄を解いてやる。その代り絵の出来が悪いと勘弁^{こうむ}しないぞ」

「それじや御免蒙^{こうむ}ります」

「何？」

「出来不出来は臨^{てほん}本次第で、一たん筆を執った上は、私の儘にもなりません」

「俺の武者振りが悪いというのか」

「そう言うわけじゃございませんが、お気に召さないといけまんから、描くのは勘弁して下さい——死人や梟^{さう}し首と並べて描いちや、第一氣色が悪うございます」

芳年は縛られ乍らも、頑強にはね飛ばしました。こみ上げて来る強大な自尊心がガタガタ顫え乍らも、斯^こう言わせずには措かなかつたのです。

「無礼な奴だ、そんな事を言うと、痛い目を見るぞ——絵描きだと言つても、描くところを見なければその帳面の絵だって、誰が描いたか解つたものじゃない。其^{そのほう}方、彰義隊の落武者ではないか」

「と、飛^とんでもない」

そう言う芳年の後に廻って一人は鐙つばを鳴らしました。

「此奴こいつ、斬つて捨てようか」

「フム、それも宜かろう」

二人は何やら合図をして居ります。

「あッ、お許しを。私は、彰義隊なんかじゃございません」

颯さつと来た一刀、縛られ乍らも危うく首を縮すくめましたが、二度目

の太刀は防ぎようはありません。

が、その時奇蹟が起りました。芳年の頭上に振り冠かむった一刀は
宙に飛んで、

「あッ」

飛退とびのく官兵の一人は、足を刳くられて屏風びょうぶの如く倒れたのです。

「己れッ」

飛付くもう一人の官兵の前へ、石垣を這い上つてスツクと立つたのは、先刻姿を隠した日下部欽之丞の満身に返り血を受けて、地獄の底から跳出した、幽鬼のような物凄い姿です。

二人の官兵はよく闘いましたが、一人は足を刳られ、一人は不意を喰つて、死物狂いの欽之丞の敵ではありません。真にあつと言う間に、左右に斬つて落されました。

二人の官兵を片付けた欽之丞は、芳年の側に寄つて、夕闇の中からその顔を差覗きました。

「氣を喪つたのか、馬鹿な奴」

冷たい笑が頬に淀んだのもほんの暫らく、次の瞬間、欽之丞の

手は、芳年の縄を解いて、その着物を剥ぎ始めます。

「あッ、お助け、命ばかりは——」

芳年は漸くようや気が付きました。

「命は取らぬが、その方の着物が入用なのだ、暫らく借りるぞ」
武装を脱ぎ捨てた欽之丞は、芳年のあわせ衿を着流し、脇差だけ一本、
深々と懷に呑み、幸い道端の水溜りで、ザツと手足や顔の血潮を
拭き取りました。

心持鬻を直して、芳年の手拭を取上げてかぶ冠ると、何うやら彼こ
やら町人らしくなります。

「それ、これは礼だ」

ポンと投ほうり出したのは小粒が二つ三つ、

「あ、もし、お武家様」

芳年はその小粒には目もくれず、襦袢一つの姿で泥の中に起^{おきあ}上^がりました。

「何んだ、金が不足か」

振り返った欽之丞、弥藏^{やぞう}さえも拵^{こしら}えて、頬^ほ冠^{おかぶ}りの中に匂う顔は、歌舞伎芝居の花道で見るとような男振りです。

「その帳面だけは返して下さい、——そいつは、私の命から二番目で」

「これか」

無意識に懷にねじ込んだ帳面を取出すと、欽之丞はポンと投^{ほう}ります。

「あ、泥が附くじやありませんか」

絵師の憤懣が、ツイ軽い抗議になりますが、欽之丞はそれを耳にも掛けず、夕闇の濃くなり行く上野、谷中、道灌山かけての木立の中を見て居ります。

「待て待てッ、怪しい奴」

不意に藪を分けて一人、日下部欽之丞の行手に立ち塞がりまし
た。羅紗らしやの陣羽織、細雨を凌ぐ陣笠、抜刃ぬきみのままの一刀を側構え
に、一寸ちよつとの油断も無い氣組です。

「へエへエ、私共は土地の者でございます。戦見物と申しちや悪
うございますが、一生に一度の事と存じまして、ツイ、ウカウカ
と深入りいたしました。お見逃しを願います」

日下部欽之丞は腹からの町人らしい滑らかな調子でした。江戸侍の器用さでしょう。

「もう一人の男は裸体はだかじゃないか」

「連れは落武者に剥がれました」

日下部欽之丞ケロリとしてこんな事を言うのです。

「頬冠りを取れ」

「へエ——」

「頬冠りのまま武士に挨拶する奴があるか」

「へエ——」

欽之丞の左の手は挙りました。頬冠りを取ると見せて、右手は早くも懷の申の脇差の柄に——

「え——ッ」

紫電一閃、

「わッ」

羅紗陣羽織の肩から鮮血を吹き上げて、相手は倒れたのです。

「お助けッ」

芳年も、あまりの事に肝を潰して、欽之丞の足許に這いました。

「馬鹿奴^めッ、何んと言う声だ、斬られたのは貴様ではないぞ」

「ヘエ——」

「其方の住居は何処^{どこ}だ」

血刀を拭い乍ら、欽之丞は訊ねました。

「あ、浅草の馬道でございます」

「大して遠くはないな、——今晚一と晩俺を泊めろ」

「——」

「いやか」

生血を拭いたばかりの刀が、芳年の眼の前へ、思わせ振りに動きます。

「と、飛んでもない」

「では、案内せい、——こんなところに長居は無用だ」

「——」

「さア」

促され乍ら、芳年は此処ここに釘付けになりました。夕闇の中に絶え入る、今斬られたばかりの武士の相好が、芳年の興味を犇ひしと捕

えたのでしよう。

何時いつの間にやら取出した帳面、それをガタガタ顫える膝の上に展のべて、芳年は矢立の筆を嚙んでいたのです。

悪い相談

それから四五日、江戸には血生臭い風が吹き続けました。

その風に憑かれてもしたように、大蘇芳年は、朝から晩まで、街から街へと、物騒な噂を追い歩いて居たのです。

小塚ヶ原の刑場は言うに及ばず、彼方かなたの橋の袂たもと、此方こなたの長屋の裏で、彰義隊の落武者が、薩長の巡邏兵じゅんらに見付けられ、縛られ、

斬られる有様を、吐氣を催すような嫌惡と、病的な熱情とで、一々画帳に納めなければ承知しなかつたのです。

馬道の留守宅では、押かけ女房のおよつが、これも押かけ落^{おちう}ど人の日下部欽之丞を介抱して、世間を狭く暮して居りました。

およつは、園^{そのばな}花と言つて千住^{こつ}で勤めた女で、年^{ねん}が明けると、大した歡迎もしない芳年のところへ轉^{ころ}げ込み、女房氣取りで三月四月も納まっていると云つた質^{たち}の女でした。

「本當にあの晩ほどびつくりしたことは無いよ。襦袢一枚のあの人の後から、彰義隊へ入つたという欽さんが、のそりと入つて来るんだもの——」

およつは、芳年の留守の間、狭い六畳の、日下部欽之丞の枕許

に坐り切りで、根が生えたように、斯う話し込んでいます。
「俺だつて驚いたよ。此春年が明けて、千住から消えたお前が、場所もあろうに、俺が逃げ込んで来たへボ絵描きの家の、長火鉢の前に納まつて居ようとは、お釈迦様でも気が付くわけはねえ」
欽之丞は、そんな伝でんぼう法な口をききます。腕はよく出来ますが、旗本の冷飯食いで、およつの園花とは、二年前からの深間ふかまだったのです。

「でも、斯うして逢えたのも、深い縁じゃないかねエ欽さん、——いくら私が図々しくたつて、旗本のお屋敷へ、誓紙起証を振り廻のりこして乗込むわけにも行かず、仕様ことなしに一番甘そうなお客の絵描きの家へ轉げ込んだのさ。其処そこへ落武者になつた欽さんが

飛込んで来るなんて、草双紙にも滅多に無い筋じゃないか、――
あの通り世間は物騒だし、幸い主人あるじは朴念仁ぼくねんじんで二人の仲に気が
付かないから、五年でも十年でも、神輿みこしを据えて逗留しておくれ
よ、ね欽さん」

長い煙管きせるを吸い付けて布団の中へ入れると、およつの身体からだは横
つ坐りに、肘はもう、男の布団へややわと重しになるのです。
「傷はもう癒なおったぜ、何時いつまでも斯こうしていた日にや、人間の造
作ゆるが弛ゆるむよ、後生だから起してくれ」

煙管きせるをポイと投ほうつて、欽之丞は枕へ頬杖を突いたなりに、下か
らおよつの滴したたる風情を見上げるのです。

「あれさ、お前、起き出した時は、追い出される時じゃないか、

それに縁側やお勝手にウロウロされちゃ、近所の人の手前もあるし」

「その近所に、飛んだ綺麗な娘が居るじゃないか」

「まア、呆れたよ。もうあれを見たのかい、——でもあれだけはお止^よしよ。お浜坊^{はまぼう}と言って、素人^{しろうと}のくせに飛んだ摺^すれっからしき。何処^{どこ}が良いか知らないが、うちの朴念仁にポーツと来て居るんだって、ホホ」

「ヘエ——、芳年師匠、芸道ばかりと思つたら、そんな腕もあるのかい」

欽之丞は何処^{どこ}までも面白そうです。

「そう言うけれど、私はつくづくあの人が怖くなることがあるよ」

「あんまり物驚きをする柄では無いようだが、——何が一体怖いんだ」

「あの通り、絵を描くより外に望みの無い人だし、臆病なほど大
人しいから、踏台に丁度ちようどよかろうと思って連れ添って見ると——

——

「——」

およつはごくりと固唾かたずを吞みました。

「あの通りの良い腕を持ち乍ら、右から左へ金になる、華魁おいらんや
役者の絵を描くのが大嫌いで、たまたま筆を取るかと思えば、不
気味な無慚むざんえ絵ばかり——、そんなものが金になるわけが無いから、
家の中は何時いつまで経つても火の車さ」

「上野の戦^{いく}さが始まると、その病は嵩^{こう}じるばかり、毎日目の色を変えて飛出しては、斬^あり合^いがあつた、晒^{さら}し物があつたと、三里も五里も歩き廻^{まわ}つて、暗くなつてから、狐が落ちたような顔で歸つて来るんだもの」

およつはそう話し続け乍ら、何んとなく胴顫^{どうせん}いを感じずる様子です。

「私はつくづく愛想を尽き果てたよ。幸い飛込んだお前さんは、私の為には渡りに舟さ、迷惑だらうけれど、何処^{どこ}へなと連れて逃げておくれ、ね欽さん」

「俺もそれを考えないわけじゃ無いが、何んと言つても、まだ探

索の目が厳しいから、一と足路地を出たら、どんな事になるか解ったものじゃない。それに何処どこへ行くにしても先立つものは金だ」
「それなら幸い——」

およつは、少しばかり隠して持っている、自分の虎の子のことを考えて居ました。

「三河島みかわしまには縁家がある。今日芳年が出る時、一筆書いて持つて行つて貰つたから、今にも歸つて来たら、何とか返事があるだろう」

日下部欽之丞は、何時いつの間にもやら、床の上に起直つて居りました。二つ三つ受けたかすり傷は、もうすっかり癒つて、此儘函館へも飛べそうな心持です。

「それじゃ、私が一緒に行けないではないか。あの人に行先まで教えてしまつては、命の鍵を握られているも同様、それに、二人の仲を薄々嗅ぎつけた様子だから、後腐れのないように、バツサリやつて、何処どこか遠くへ飛ぶ工夫が肝心だと思ふが――」

およつの肝の太さ、あまり気の進まぬ日下部欽之丞を説き伏せて、底の知れない悪魔の淵へと誘い入れる積りつもでしよう。

隣の娘お浜

「ちよいと」

ひそやかな声に呼止めよびとられて、芳年は思わず足を淀ませました。

今日は不思議に早く帰った路地の入口、共同井戸の前に、白い顔が自分を見詰めて居たのです。

「お浜さんじゃないか、何んか用事かい」

芳年は気軽な調子で斯う立ち止りました。世帯摺れはして居りますが、十九になったばかりのお浜には、娘らしさが、顔にも姿にも、声の爽やかさにも充分過ぎるほど匂って居たのです。

「今入って行くのは、お止しなさいよ、迷惑する人が二人あるようだから」

その娘の口に含んだ毒が、妙に芳年を焦立たせます。

「何？」

「ね、芳年さん、人のことだけど、私はもう、腹が立って腹が立

つて、あの彰義隊の生つ白い二本差を、いつそ屯所へ訴人してやろうかと——」

「シツ——」

二人は継穂もなく、黙つて顔を見合せました。

「お前さんが、あんまりお人よし過ぎるんですよ。あんな恩知らずの畜生は、なぶり殺しにでもされて——」

「なぶり殺し？」

「首は三尺高い木の上に梟さくらされ、死骸は犬の餌えにでもなりや宜いに——」

お浜いかりの怒は際限もなく爆発します。芳年をいとしと思う心が、斯こうまで極端に働いて、全く違った方角へ忿怒の形で発展して行

つたのでしよう。

「なぶ戮り殺し、——さら梟し首、——そして死骸は犬に——」

芳年の空想力は鼓舞されました。無慚絵の素晴らしい題材が、お浜の言葉の上に、いきいき活々と築き上げられて行くのです。

「足りない、まだ足りない」

江戸人の心を恐怖のドン底に投込んだ、私刑、暗殺、おしこみ押込、

きりあ斬合い、——そして最後に彰義隊の戦争から、寛永寺三十六坊の炎上、八百八町の落武者狩までの、血と焰の印象が、まだまだそんな事では表現し切れなかったのです。

「何が足りないと言うんです、え？」

「凄さが足りない」

「え？——お前さん、確^{しつ}りして下さいよ。あんな二本差なんか、芋侍に引^{ひき}渡^{わた}しさえすれば、それでお仕舞なんだから」

お浜には、芳年の心持が解る筈ありません。日下部欽之丞とおよつの関係を言い当てられて、フラフラと気が変になったのであるまいか——お浜はそんな事を考えるのが精一杯だったので「放つて置いてくれ、お浜さん、俺にも少しは考えたことがあるから——」

解つたような、解らないような事を言い捨てて、芳年は自分の家へ入って行きました。

「——」

その臆病らしい姿、作り笑いさえ浮べた横顔を、お浜はどんな

に腑甲斐のないものに思つたのでしよう。

御家人の子に生れて、その描く絵と同じように、骨つぽい男らしい人柄を見上げる心持で居たお浜は、近頃の芳年の意気地のない態度に、言いようのない憤懣を感じて居たのです。

「皆^みんなあの女のせいだよ」

お浜の眼には、恥というものを、何処^{どこ}かに置き忘れて来たような、およつの白粉^{おしろい}焼^{やけ}のした顔が、はつきり浮ぶのでした。

恐ろしい予感

「日下部さん、御安心なさい。三河島の御親類じゃ、日下部さん

が無事と聴いて、大喜びでしたよ」

芳年の言葉にも態度にも、何んのこだわりもありません。

「それは有^{ありがた}難い」

日下部欽之丞は、ツイ今しがたまで、およつと、よからぬ事を企んでいたことなどは、綺麗に忘れてしまった様子です。

「で、——馬道よりは近所が遠いだけでも身を隠す都合が宜からうから、すぐおつれするようと、斯^こう言うお言葉でございました。世間が物騒だから、お返事を口移しで、書いたものは持つて参りませんから——」

「それで結構、飛んだ御苦勞であつたな、早速支度をして、今夜にも出かけるでしょうか」

欽之丞はもう、まだ癒らぬ首の傷のことも忘れて、床から飛起きて居りました。

「いえ、夜は反つて物騒かえですよ。私は諸方をほつき歩いて、其辺中の官兵の屯所は、一つ残らず顔馴染かおなじみだから、私と一緒においでなさい。とがめられたら、私の弟子ということにしましょう。陽の当るうちの方が、どんなに安心だかわかりません」

「成程なるほど、そう言ったものかも知れぬな」

日下部欽之丞は支度を始めました。月代さかやきを広く取って、根を下げた町人鬘まげ、芳年の袷あわせ、手拭はわざと肩に、脇差は鐔を外して懷に隠し、突っかけ草履ぞうりで、芳年の後に続きます。

「ね、欽さん」

「
門口まで追つて出たおよつ、芳年が一と足先へ行つたのを確かめて、

「わざと途中で手間取つて、何処どこか人ひと氣けの無いところで——」
およつは手刀で、そつと物を切る真ま似ねをして見せます。

「それが、およつ——」

「待つてますよ、暗くなったら、直ぐ迎いに來て下さい。解つて
欽さん」

「
欽之丞はうなずくと、一と足先に行つた芳年の後ろ姿を追いま
した。」

未刻やつから申刻ななつ頃まで、

およつは坐つても起つてもいられない心持でした。長火鉢の前へ行ったり、門口へ出たり、お勝手を覗いたり、煙草たばこを吸ったり、茶を呑んだり、溜息をついたり、

「欽さん」

何んかな邪まなよこしことを念ずるような心持で、不思議に胸騒ぎに悩み続けたのです。

ヒョイと見ると、垣の間から白い顔、

お浜のずるそう狷相な眼と、人を馬鹿にしたような——その癖、男好きのしそうな赤い唇が見えるではありませんか。

「何んだい、お前は？ 昨日も一昨日もおととい、雌犬のように、変なと

ころから覗いたりして、いくら棟割長屋だって、垣の中は人様の城郭だよ、風の悪いことしやがると、水ブツ掛けるから」

およつは気が立って居りました。

「芳年さんは、まだ帰らないの？」

お浜の調子の邪念の無さ。

「それが何^どうしたと言うのだえ？」

ツイ釣られるともなく、およつも縁先へ泳ぎ出しました。

「だって、ツイ先刻^{さつき}、田圃^{たんぼ}で彰義隊の落武者が捕まって、斬った

とか斬られたとか、大変な騒^{さわぎ}をしたようだから、此方^{こつち}に何んか変

りが無きや宜いと思って——」

お浜の調子のさり気ない滑らかさは、およつに取っては、此上

もない威嚇でした。が、——あんなに用心深い支度をして行つた欽さんに、万に一つ間違ひなどある筈ありません。あの人が訴人するか、屯所へ引渡したのなら別だけれど、あんな臆病者に、そんなことが出来る筈も無し——もりあが盛上つて来る恐怖を、無理にも押付けて、およつは乾く唇を噛みました。

「彰義隊の落武者？ そんな者に掛り合ひは無いよ。余計なお節介をするより、さっさと自分の家へ歸つて、内職の楊枝でも拵えるが宜い、馬鹿馬鹿しい」

「そんなら宜いけれど——」

お浜は煮え切らぬ事を言い乍ら、臆病な狐のように、振り返り振り返り歸つて行きます。

「畜生ッ、何んて嫌な奴だろう」

およつは縁側から引込みました。

が、その時丁度、格子を開けて、何時^{いつ}になく、ノソリと入つて来た、大蘇芳年の蒼い顔と、眼を外^{そら}しようもなく、ハタと逢つてしまったのです。

「あッ」

恐ろしい予感が、水のようにおよつの背筋を走りました。

血に狂う美女

「およつ、居たか」

うっ
洞ろな声、眼はギラギラと瀬戸物のように光ります。

「お前さん、何んて顔だい、——あの人が若しも？」

およつの言葉は喉の中で消えました。

たんぼ
「田圃で官兵に捕まったよ」

「えッ」

「上野で散々官兵を斬ったことを知って居る者があつて、其場でなぶり殺し同様」

やつば
「じゃ、矢張り」

「これを見ろ」

芳年は、ポンと画稿を投げました。

手に取って見る迄^{まで}ありません。およつの膝の前でパツと開い

たのは、矢立の墨一色で描いた、至つて粗末な略画乍ら、紛れもない町人姿にして出してやった日下部欽之丞が、多勢の官兵に取巻かれ、乱刃の下に斬りさいなまれて^{うらみ}いる怨の形相です。

「えッ、畜生」

およつは画稿を叩き付けて、いきなり芳年に武者振り付きました。

「あッ、何をするんだ」

「お前と言う男は、何んと言う卑怯者だい。私とあの人の仲を疑つて、力ずくで叶わないから芋兵に、訴えて召し捕らせ、こんな虐^{むご}たらしい目に逢わせやがったろう」

「俺がそんな事を知るものか、離せ」

「わざわざ陽のあるうちに連れ出したのは、これを絵に描き度いために違いない。三月でも四月でも、一緒に住んだお前の心持が、私に解らないと思うのかッ」

「馬鹿なッ」

「お前は上野で官兵に斬られるところを、あの人に助けられたと言つたろう。一旦かくまった恩人を訴人して、義理も人情もない、それでも江戸っ児この端くれかい。畜生ッ、意気地なし、そのくせ、いけ図々しく、こんな虐むごたらしい絵まで描いて来やがって、ぬけぬけと私に見せるなんて、何んて根性だろう、外道ッ、鬼ッ」

およつは半狂乱でした。揉みも揉んだ姿で、芳年の首へ胸へ、髻たぶさへと武者振り付くのです。

「俺じゃない——誰か訴人をしたに違いないが、この芳年じゃ無い」

「それほど潔白なら、何んだって、こんな無慚絵なんか描いたんだ。人の死ぬのをヌケヌケと見ていて宜いものか悪いものか、思い知らせてやるから、畜生ッ」

小格子で年一杯叩き上げたおよつは、妖艶で取廻しの良い女でしたが、その代り、執拗で病的で、意地っ張りで氣違い染みた女でした。

「待ちなよ、俺だって人の殺されるのが面白いわけじゃないが、今の時世を写すには、こんなものでも描くより外に仕方が無い。天下後世に、俺の芸道を遺すためには、油汗を流し乍ら、齒ぎし

りして、無慚絵を描くのだ」

「まア、何んと言う曲った根性だろう。地獄の鬼だって、そんな虐^{むご}たらしい事ばかり追い廻しちや居まい——それほど芸とやらが大事なら、美事^{みごと}私も成敗しておくれ。お察しの通り欽さんは私の命まで打^{うち}込んだ深間さ。それがどうしたんだい、畜生。さア、殺しておくれ、立派にやつておくれよ」

半狂乱のおよつは、芳年に身体^{からだ}を摺り寄せて、四方^{あたり}構わずわめき散らすのでした。

「馬鹿ツ、宜い加減にしないか。俺はそんなことで、人を殺す量^りようけん

見^{けん}などは微塵も無い。氣に入らなきや出て行くが宜い。どうせお前が勝手に飛込んで来た家じゃないか、死のうと生きようと、

お前の好きなように——」

芳年もツイ持て余し気味に、およつの絡み付く身体からだをおし退のけました。

「私一人で死ねと言うんだね、——ようし、あの人を訴人したお前の前で、見事死んで見せよう、驚くな」

いきなり台所へ駆け込んだおよつ、芳年がそれを追う隙もありません。キャツと言う悲鳴、——研ぎすました出刃庖丁で、我とわが喉も胸も、顔までも掻き切つて、満身鮮血を浴びたまま、よろばいよろばい這い出して来たのです。

「あッ、何んと言うことをするんだ」

「さア、この、私の顔をよく見ておくれ。この顔を、この姿を、

——お前の筆で描けるものなら描いておくれ」

宙に泳ぐ手、銀杏いちよう返しの根はガツクリ抜けて、血潮の網目を

引いた拳に、黒髪がバラリと絡みます。

女の顔は、美しいだけに凄まじいものでした。引釣ひきつる眉、ギラ

ギラと死の苦痛を映す瞳め、血みどろの頬も唇も痙攣して、綺麗な歯並が、締木にかけたようにギリギリと鳴ります。

「この顔を見て、お前が夜寝られるか寝られないか、——よく見
ておくれ。欽さんを訴人した上に、この私まで、——手に掛けな
くても、なぶり殺しにしたお前だ——」

「待て、言うことがある。何も彼も間違かいだらけだ、——あれ、
あれを聴け」

芳年は血に狂う手負いのおよつを辛くも抱き止めて、二軒長屋の隣家——お浜の家のたたずまいを指します。

生垣一つを隔てて、明けっ放した庭先の夕陽に、何も彼も手に取るよう。この時お浜の家には、隊長に従って官兵が七八人、ドカドカと入って来たのでした。

描き出す怨女の悪相

「日下部欽之丞を訴人した、浜というのは其方か。女乍ら、賊軍の大物を討たせた手柄は拔群だ。追つて褒美の御沙汰はある筈だが、取あえずお上のお言葉だけを伝えて置く」

そう言う官兵の隊長の声が、近所合壁へも聞えよがしに、凜々と響き渡るのです。

「――」
それを聴いたおよつ、芳年の腕の中に、必死の眼を見開きました。

「聴いたか、およつ、――あれで、何も彼も解つたろう。改めて言うまでもないが、――俺は唯ただの絵描きだ。世の態さま、人の姿は描くが、訴人や企らみをする柄ではない、――俺の言葉も耳に掛けず、お前は飛んだ早まったことをしてくれたじゃないか」

「――」
「どうせ勤めをしたお前だ。馴染も深間もあつたところで、俺は

そんな事でヤキモキするものか」

静かに説く芳年、隣の庭からは官兵が引揚げて、お浜のいそいそとした姿が、それを送って出た様子まで手に取るよう。

「お前さん」

「解ったか、およつ」

「堪忍しておくれ、私は——」

今死ぬおよつの眼には、初めて油のような涙が沁しみ出しました。

「解ったらそれでよい。傷は浅い。静かに手当をするが宜い」

「いえ、私は助からない。助かり度くもない、——お前さんに済まないけれど、私は、私は欽さんの後が追って行き度い」

およつは声もなく、芳年の膝の上に、身を顫わせて泣くのです。

「それも解っている、どうせこの俺とは浅い縁だ」

「堪忍して」

「可哀想に、——お前という女は」

「お前さん、——たった一つの願い、聴いてください」

「何んだ」

「お前さんは此間から、殺しも斬合さしかいも梟さくらし首も描いたが、女の、怨女の末期は手本が無いと言つて居なすつた」

「——」

「幸い、この私の浅ましい姿、——息のあるうちに、描いて下さい、——せめてもの恩報じ」

芳年の膝を降りたおよつは、最後の力を絞り出すように、柱に

縋^{すが}つたまま、フラフラと立ち上るのでした。

「それはいけない、——お前の顔に怨は消えた。死ぬ苦しみはあつても、怨女の悪相は無くなつてしまつた」

まこと、法悦に似たものが、血みどろなおよつの顔を、仏作つてさえ見せているのです。

が、形勢は一瞬にして変りました。

此時、隣の物音に氣の付いたお浜が、官兵を送り出した序^{ついで}に、庭の木戸を押し開けて、ヒョイと入つて来たのです。

「あッ」

目の前に展開した、血みどろの光景に、お浜は逃げることも忘れて釘付けになりました。

「畜生ッ、お前が訴人したんだね、——この怨み、覚えてお出で」

お浜の顔を見ると、^{たちま}忽ちおよつに蘇生^{よみが}える怨み、柱に絡んだ身^か

体^{からだ}が醜^{みに}くく歪むと、眼も、口も、一瞬蒼白い焰^{ほのお}を潜ったように、

深怨無残の悪相が、メラメラと燃え上るのでした。

「助け——てエ」

あまりの事に、お浜は狭い庭の上に這いました。眼は縁の柱に

伸^{のび}上る手負に吸い付けられて、娘の身体^{からだ}はあまりの恐怖^{むし}に蟲ほ

ども動きません。

「口惜^{くや}しいッ」

キリキリと鳴るおよつの齒、風の無いのに、サツとなびく黒髪、

柱に絡んだ手が緩むと、手負の身体^{からだ}が、ゾロゾロと崩折^{くずお}れて、庭

のお浜を覗き加減に、ワナワナと双手もろてを差伸べます。

最早、背に迫る死の手、お浜をつれて、八寒地獄の底までも行く積りでしよう。

芳年は思わず画帳を取上げました。死の一瞬手前の、怨女の悪相が、名筆に従って、サラサラと描き上げられて行くのです。そのかみ、猛火の中のわが娘を見たという、仏画師良秀よしひでのように、——人の世の掟を超えた、芸道三昧の恍惚境にひたり切って、——浮世絵師芳年の顔は、名ある高僧のように澄み切ったのでした。大蘇芳年の傑作「英名二十八人衆句」は斯こうして出来上りました。徳川末期の江戸を彩った、血みどろの世界が、「団七九郎兵衛べえ」になり「稲田新助いなだしんすけ」になり、「直助権兵衛なおすけごんべえ」になり、そ

して怨を含んで殺されて行く「笠森お仙」の美女殺戮の図となつたのです。

芳年の無慚絵が持った境地、その生々しいリアリズムは、明治画壇に大きなスタートを与えました。それが水野年方みずのとしかたとなり、おちあいのよしき落合芳幾おちあいのよしきとなり、てるかた輝方てるかた、ひでとも英朋ひでとも、としつね年恒としつね、としひで年英としひでとなり、そして巨匠かぶらぎきよかた鏑木清方かぶらぎきよかたとなつたことは言う迄ありません。

青空文庫情報

底本：「野村胡堂伝奇幻想小説集成」作品社

2009（平成21）年6月30日第1刷発行

底本の親本：「芳年写生帖」春陽堂

1939（昭和14）年

初出：「オール読物」

1938（昭和13）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「さア」と「さア」、「まア」と「まア」の混在は、底本通り

です。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2015年8月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

芳年写生帖

野村胡堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>